

第198回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第7回通信句会)開催

通信句会も7回目を迎えますと、気が付いた不具合な箇所は改善され、アウトプット表は随分と見易くなりました。今月の重責を果たして下さった森田多佳さん、投句一覧表も選句結果報告も見易い形になり有難うございました。兼題の提示も予定日の6月4日に、原さんから奥田さんへとリレーされて、私たちにも円滑に連絡されました。有難うございました。

6月4日から18日までの2週間をかけた、第7回「通信句会」に参加されたのは次の方々です。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、中間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然(17名)。

今回、提示いただきました兼題1「水馬(あめんぼう)」も、兼題2「日傘」も、出題の時点では、傍題とか副題と呼ばれる別名が添えられており、例えば「水馬(あめんぼう)」や「あめんぼ」は、地方によっては「水馬(みずすまし)」とか「水蜘蛛(みずくも)」と、呼ばれていることが照会されていますし、「日傘」にしましても「絵日傘」、「白日傘」、「日からかさ」、「パラソル」などの副題が照会されています。

兼題の提示を受けますと、私たちは限なく歳時記に目を通し、何とか新しい感覚の句を詠もうと苦心もしますが、なかなか簡単には参りません。今月も皆さんから集まりました全部で51句になる努力の結晶、その中から皆さんが選句して、天賞、最多得票賞(☆印)に推挙した句は下述の通りです。

兼題1. 「水馬(あめんぼう)」又は「あめんぼ」

◎『あめんぼう B-29の青い空』	憧岳	天3
◎『あめんぼう流れて戻りまた流る』	明峰	天1
◎『ついときてこれでどうだとあめんぼう』	多佳	天1
◎『ひょうきんな水馬眺め日の暮るる』	一光	天1
◎『水蜘蛛や伊賀か甲賀かついついと』	荻女	☆7

兼題2. 「日傘」

◎『霊園の細き道行く白日傘』	多佳	天1☆9
◎『絵日傘は道一筋を彩りて』	傘吉	天1
◎『色白の中はイケメン黒日傘』	清助	天1
◎『伏し目がち日傘傾け過ぎる女』	蒼樹	天1
◎『遠き日の記憶の先の白日傘』	歌多音	☆9

当季雑詠の自由題(=仲夏=)

◎『六月のカフス釦の重くあり』	明峰	天2☆9
◎『梅雨夕焼け赤銅の富士悠悠と』	栄女	天2
◎『子を叱る声高くなる暑さかな』	多佳	天1
◎『草に乗り風に乗りたり雨蛙』	晶如	天1
◎『山寺に貧しき蔵や柿の花』	荻女	天1

兼題1. 「水馬」では、憧岳さんの句「あめんぼう B-29の青い空」が、天賞三つを獲得しました。中七で使われた「B-29」と言えば、私たちの年代人には、暗い太平洋戦争の地

獄からの使者との印象を与えます。そして終戦の日、8月15日のあの青い空も印象的でした。この句の「あめんぼう」から連想する B-29 と青空の記憶が、読者の琴線を振るわせました。次に明峰さんの句「あめんぼう流れて戻りまた流る」が、天賞一つを獲得しました。あめんぼうの様子をじっと見ている中から、この句はなつたと思われそうですが、水に流されていく姿や、慌てて元の位置に戻ってくる姿に、さながら人間の日常を見せつけられるようで、強い衝撃を与えられました。次に多佳さんの句「ついときてこれでどうだとあめんぼう」も、天賞一つを獲得しました。この句もあめんぼうの動きをじっと見ているの閃きですが、作者には「どうだい」と、あめんぼうからサインを送られた気がしたのでしょうか。読者には何か和やかで滑稽なサインに感じられたようです。もう一句、一光さんの句「ひょうきんな水馬眺め日の暮るる」が、天賞一つを獲得しました。この句もあめんぼうのユーモラスな一面を見続けています。見続けているうちに日が暮れてしまったと……。読者はその可笑しさに天賞の一票を投じました。最多得票賞（☆印）は、荻女さんの句「水蜘蛛や伊賀か甲賀かついついと」が、獲得しました。あめんぼうを忍者に見立てた中七、下五の「伊賀か甲賀かついついと」というフレーズに、読者は可笑しさを覚え、得票が集まりました。見事です。

兼題2。「日傘」では、多佳さんの句「霊園の細き道行く白日傘」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句を天賞に推挙するメッセージにもありましたように、まるで映画の一シーンを上空から眺めているようですね。小泉堯士監督か誰かの映画でも見るように、白日傘の夫人がお墓に向かう姿が脳裏に浮かんで来ます。次に傘吉さんの句「絵日傘は道一筋を彩りて」が、天賞一つを獲得しました。この句は、道一筋に前進していくというか、動いていく絵日傘に、読者は強く惹きつけられます。中七から下五の「道一筋を彩りて」が、効果を発揮しているのではないのでしょうか。次に清助さんの句「色白の中はイケメン黒日傘」が、天賞一つを獲得しました。黒日傘の中には、色白のイケメン男が・・・と、いうようなことでしょうか。イケメン男はラッキーですね。この句に関連するような一句、蒼樹さんの句「伏し目がち日傘傾け過る女」も、天賞一つを獲得しました。この句は、前句とは反対に、通り過ぎる日傘の中には、伏し目がちの美女が登場して、日傘も恥ずかしさを隠してか、少し傾いているようです。この兼題ではもう一句あります。歌多音さんの句「遠き日の記憶の先の白日傘」が、天賞はありませんでしたが、最多得票賞（☆印）を獲得しました。中七「記憶の先の」という表現が、とても遠い昔の思い出であることを物語っています。そのときの「白日傘」にはどんな思い出があったのでしょうか。その記憶に共感する多くの一票が集まりました。

当季雑詠の自由題では、明峰さんの句「六月のカフス釦の重くあり」が、天賞二つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。六月梅雨時の鬱陶しさの表現に「カフス釦の重くあり」とは、実にお見事です。思えば、カフス釦が重く感じられた現役時代・・・、確かにありました。次に栄女さんの句「梅雨夕焼け赤銅の富士悠悠と」が、天賞二つを獲得しました。この句の語るのは、ただただ富士の見事さです。夕焼け時に富士が悠悠と赤銅色で現れました。今年は早や梅雨も明けるのでしょうか。こんな富士山に、一度お会いしたいものですね。次に多佳さんの句「子を叱る声高くなる暑さかな」が、天賞一つを獲得しました。子供の天真爛漫さと仕出かす悪戯、しかもこの暑さです。ついつい叱る声も高く、大きくなりますね。この「仕方ないわねえ」に、読者の得票が集まりました。なお本日の多佳さんは、三句とも入賞されました。おめでとうございます。大拍手！・・・なかなか出来るものではありませんね。

次の晶如さんの句「草に乗り風に乗る雨蛙」も、天賞一つを獲得しました。この句は草に乗り、風に乗って揺れている雨蛙の屈託のない姿に、何かホッとさせるものを覚えます。上五、中七の「草に乗り風に乗る」の表現が、どこか滑稽な雨蛙の平和な時間を物語っています。もう一句、荻女さんの句「山寺に貧しき蔵や柿の花」も、天賞一つを獲

得しました。この句は、山寺の貧しい蔵と質素な柿の花という静かさの中のおちつきと寂しさをイメージさせてくれます。天賞推挙のメッセージにも「山寺のひっそりとした蔵の前に落ちた柿の花」に風情を感じたとありました。

今月は6月30日（水）に、次回199回「道草」句会（第8回目の通信句会）を開催するためのオンライン会議が開催されます。「通信句会に活路が見つけられないか」ということでは、巷に「夏雲」システムという仕組みがあります。井上蒼樹さんが研究して下さいます。どうぞよろしくお願ひ致します。

では6月30日、PC上でお会ひ致しましょう。

白然（記）